Japanese Association for Religious Studies



# 池上良正著『近代日本の民衆キリスト教――初期ホーリネスの宗教学的研究――』

東北大学出版会　二〇〇六年一一月一日刊
A5判　二九一頁　二八〇〇円＋税

葛西賢太

本書は、日本における民衆的キリスト教の重要な一系譜「ホーリネス」をなした人々についての研究である。著者はホーリネスの全体ではなく、「初期ホーリネス」に焦点を当てる。また著者の関心は教義よりも人間にある。神学思想には簡単に触れるが、むしろ、ホーリネスの担い手であった人々が、どのような仕事をし、どのような悩みに苦しみ、ホーリネスに何を期待し、何を得ていたかがリアリティ豊かに語られている。労働、愛児の死という「苦」や、救済体験にそれぞれ一章を割く構成により、ホーリネスの教理が実際にはどのように受け入れられたのか、その現場を示す工夫もされている。

このように優れた本書だが、評者にはいくつかの点で補いたいところもある。以下、まずは本書の構成に沿って要約する。その際、聖潔や神癒が完全なものであるという奇跡の主張をどう受け入れるかに注意を払いたい。要約により全体像をお目にかけたあと、評者の感ずるところを、三つの観点から簡潔に述べる。第一の観点はメディアについての考察であり、第二の観点は同じメソディストから生まれた、ホーリネスにとっては兄弟のような教団、救世軍との比較によるものである。第三の観点は、ホーリネスの担い手と著者が見なす「民衆」についての吟味である。

**本書の構成**

以下の六章で本書は構成されている。いずれも、教義・倫理的理念と現実とを往還させ、両者のディレンマがどのように克服されるのかを示すという、著者の宗教学像を反映したものとなっている。

序　章　宗教学の研究課題としての初期ホーリネス
第一章　聖潔（きよめ）を掲げた人たち
第二章　神癒（いやし）の教理と愛児の死
第三章　電信員伝道をめぐって
第四章　信徒たちの「救い」
第五章　二つのリバイバルと再臨信仰
第六章　近代日本における聖霊派の系譜

序章では、民衆キリスト教としての「初期ホーリネス」がなぜ研究対象として選ばれたのか、また、どのように研究されるのかが示される。現在のホーリネス系教団につながる、「初期ホーリネス」、教会の本格的活動が開始された明治二三年（一八九〇）頃から、教会が分裂する昭和八年（一九三三）頃までの流れが、研究対象となる。



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

リバイバルという強度の感情的宗教体験を導き、多くの信奉者を得たホーリネス。しかしそのラディカルな世俗批判ゆえか、体制からの弾圧も受けることになるなど、ネガティブな歴史を持つ。伝道重視のホーリネス系教団にとって、このような過去の思想や歴史を吟味する作業は、教団外においても、教団内においても近年までほとんど行われなかった。影響力の大きかった宣教者中田重治（一八七〇―一九三九）は、多くの信者を導きながら、晩年は固陋ゆえに孤立と教団分裂を招く。分裂後の中田側の教団は彼を最高の権威と位置づけ内閉化する（「神が中田監督に啓示」し「中田監督が福音によりて創始せるキリスト教」（『きよめ教会綱領』[1]））などバランスを欠いたものとなっていく。

著者はしかし、「初期ホーリネス」の研究は旧態依然としたファンダメンタリストの発掘ではなく、実践的な意義もあるという。大正から昭和にかけての民衆的キリスト教の大きな流れを作り出していたホーリネスの分析をすることは、現在に至る日本国内のクリスチャン比率の低さについて考察するためにも重要な作業だからである。また、後述するように、ホーリネス系教団の道徳的禁欲思想は、日本の近代化を支えた当時の若者（「煩悶青年」）の道徳的ディレンマと深く関わっており、それを明らかにできる点からもこの研究は意義がある。

第一章は、ホーリネスの重要教理「四重の福音」の内容、新生、聖潔（聖化）、神癒、再臨を取り上げる。ことに「きよめ」と読みがあてられる聖潔が重要である。

聖潔とは、聖霊の力に満たされて心身や生活習慣が浄化されることであり、また過去の罪と未来の罪の可能性からの完全な解放が得られると強調される。メソディストのなかで培われた、人間が完全へと進化を続けうるという思想はより極端なものとなり、飲酒喫煙の厳禁のみならず仁丹のような代用物も不可となる。このような罪の規定は厳格すぎるように思われるが、聖潔を体験すれば実際にそのような「罪」を犯さなかったのだろうかという疑問が評者には湧く。ホーリネスでは「信者は罪を犯さ」ないと断言されている。しかし「若しも罪を犯したら」「キリストの血によって罪は赦される」が、「之は例外の出来事」と留保がつく（六四―五頁）。「一回の瞬間的な全き聖潔」（二七七頁）を強調する教理は、この世の現実とつきあわせるとき、見直しが必要となる。のちにこれを救世軍山室軍平の聖潔観と比較しよう。

このような徹底した聖潔の教理に引かれたのは、意外にも職業的宗教人や思想的エリートではなかった。近世以来の通俗道徳や忠君愛国の理念などの「お仕着せの道徳を生真面目に吸収し、なおかつ厳しい生存競争や目新しい消費文化への誘惑が渦巻く都市空間に生きることを強いられた」「煩悶青年」たちであったと、著者は述べる（六二頁）。言い換えれば、通俗道徳がホーリネスの教理受容の前提となったということであり、またこの通俗道徳の保持者と、著者のいう「民衆」とはほぼ重なるようである。著者の考える「民衆」の内容については後述したい。

第二章は、聖潔に並んでホーリネスで強調される神癒の教理について、その教説と受容とのギャップを、愛児の死を巡るデ



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



ィレンマを通して考察する。病気とは「律法を破りし結果として来る神の詛（のろい）」であり、「医薬の全面的拒否」という態度をとる中田は、自分の母と妻がともに生死の境をさまよった末に神癒された体験を語る。神癒が完全であるという教理とつきあわせると、愛児の死は教理の矛盾、神癒の失敗となってしまうが、実際には医療が高価でまた当てにもならなかった時代に愛別離苦を味わう信者も少なくなかった。そしてその苦しみは、跡継ぎを失った悲しみは、人生の意義さえ問われかねない精神的苦痛であったはずである。たとえば、中田の弟子でありまたホーリネスの「五博士」と尊敬される一人であった米田豊は、愛児のうち四人を失っている。はじめに米田が若き日に病の友人に送った、思いやりを含みながらもホーリネス教会の一途な神癒の教理そのままの硬直した諭しが引用される。愛別離苦が自身の問題となっても、米田は愛児を失った悲しみを勝利の証しにまで強引に昇華しようとする。しかし、愛児の死という苦しみを幾度も経て、米田の言葉は、神癒の教理が自分には及ばないのではないかと苦しむ信徒たちを癒す言葉へと変容されていく（九三頁）。

第三章は、地方から出身し劣悪な環境で努力する電信員の信仰を通して、ホーリネスの信徒である「民衆」あるいは煩悶青年たちの実践を見る。実は中田とともにホーリネスを創始したカウマンとキルボルンという米国人は、来日前は電信技師であり、技師仲間の伝道団体を作っていた人物でもあった。そのため来日後もクリスチャン電信員への伝道は積極的に行われ、月刊誌『天よりの電報』が設けられて米国の技師伝道雑誌が翻訳掲載された。本章ではこれが資料となる。電信という技術の神秘性と不完全さが、人間と神との関係を、単なる比喩を超えて実感させ、電信員一人一人の努力と責任を自覚させる。かなり荒っぽかった電信員の文化に煩悶する青年が、メソディスト的な向上の道を歩んで聖潔にいたろうとする姿が語られる。

第四章は、『聖潔の友』における「あかし」（体験談）の分析である。ホーリネス系の機関誌に見られる豊富な体験談の分析は、これまでほとんど行われてこなかったと著者は指摘する。機関誌掲載の体験談の研究には制約も多い。体験談は、特定の主題を揃えて書かれたものではなく、語り手も語彙が豊富ではなく、掲載にあたり選択と加筆を受けているという点などがあげられるが、それらを差し引いても一定の意義がある。「あかし」の内容をみると、最も多かったのが神癒で、次いで罪深さの告白が来るという。神癒は当時の医療を受けられなかった多くの病者を引き寄せたことがわかる。また、罪深さの例としては、飲酒喫煙や不純な異性交遊のみならず、寄席や芝居、活動写真なども罪深いものと認識されていた。一方、悪魔・サタンは語としては頻繁に語られるものの、罪への誘惑をめぐって抽象的に表現されるのみで、悪魔祓いの事例はないことを著者は指摘する。そして、怨念が交錯する民俗宗教の世界からは距離をとったのではないか、その理由は罪をめぐる煩悶が中核にあるからではないかと、著者は考察する。かくしてここにも、煩悶青年のダブルバインドに見るように、近代日本が抱えていた価値観や道徳観をめぐる根本的アポリアが鮮やかに映し出されていた（一九四頁）ことが確認される。



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

なお「あかし」の中の語彙についての著者の考察は興味深い。Holiness, sanctificationに聖潔（きよめ）の訳語を当てるとき、武士道的な潔さや中世、禊ぎや祓いなどと接続するような、民俗宗教的な含意が保持された。これにより、近代日本の修養主義が外からの強制にとどまらず、主体的能動的にも青年たちを縛ることとなったとみるのである。また神癒の事例に見るように、キリスト教会ではすでに明治期から「いやし」が一般的な用語として用いられていた。著者は、「いやし」の語を現代の産物のように見なすのは、キリスト教研究の知識主義への偏りやホーリネスなどの民衆的動向の見落としなどが一因と考える。

第五章は、リバイバルに対する神学的賛否両論を超えて、時代背景と人物をたどることによる位置づけが行なわれる。第一次世界大戦後の好景気のなかで起こる大正八年の「リバイバル」は、多くを回心に至らせ（ただし教会に残ったものはさほど多くなかったが）、クリスマス祝いの全廃など、神の再臨を待ち望む期待の雰囲気に満ちていた。しかし指導者層には、冷静にリバイバルを仕掛ける一面もあったのではないか、その空気を見抜いて早々に教団を去った者もいたのではないかと著者は考える。やがて生じる教会同盟運動に対して中田重治は強く批判し、教会人は世俗の政治問題に関わらず、聖霊による一致と魂の救済に専心すべきという姿勢をとる。これはファシズムと癒着しないという熟慮によるのではなく、社会への無関心と、ひたすら神の再臨を待ち望む内閉的な生き方であった。したがって賀川豊彦の社会事業も、クリスチャンの代議士も世俗との関わりとして否定するが、神社問題については「迫害されても絶対に神社は拝まない」と言い切るなど、矛盾をはらんでいた（二二八頁）。このような内閉的な姿勢は、昭和においては閉塞的なリバイバル待望となって現われ、中田は昭和三年、教会の完全自給と福音使の無給制を発表し、リバイバルが起こり霊魂が救われれば生活問題は自然解決、といった極論を唱えるに至った。期待しているリバイバルはなかなか来ず、迫害する他教派や世間一般に対する苛立ちと怒りは昂揚し、昭和一七年以降の弾圧にもつながっていく。

第六章は、近代における聖霊派の位置について俯瞰する。米国での大覚醒運動、ペンテコステの始まり、それに先立つかも知れない日本でのリバイバルから現在の聖霊運動に至るまでが通覧される。三世紀ほどの流れをこれだけの紙数で追うのは無理な感もあるが、既述したホーリネスの思想的特徴、たとえば中田における日本民族選民視や神癒の強調などが、特例ではなく、日本国内の他の民衆的キリスト教の中でも見られる事例であることが示される。現代の聖霊運動において、アジアのキリスト者との交流のなかで、日本という国家的枠組みが相対化されることも指摘される。著者は他の著作や論文で近年の聖霊運動の諸側面について詳細な検討を重ねているので[2]、本章の記述は詳細さに欠けるものの、著者がホーリネスをめぐる広い領域をカバーしていることが確認される。

## 本書への問いと提案

ここまで著者の主張をまとめることで、本書がこれまでの著



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



者の仕事と接続し、また日本におけるホーリネスというキリスト教会の興味深い事例を、「民衆」を問い「救済」を問う優れた著作であることが確認できたと思う。ここからは、評者の観点から、本書への問いと提案を、三つほど投げかけたい。

本書のうち、特に第三章「電信員伝道」と第四章「信徒たちの『救い』」は、教団機関誌の体験談を分析したものとなる。著者はホーリネスにおいて体験談が重視され、機関誌でも多く掲載されていたと語る。この体験談は、機関誌というメディアにおいてどのような位置をなしていたのだろうか。たとえば中田の強いカリスマ性を鑑みると、『聖潔の友』などに収められた体験談の性格や位置づけはどうなっているのだろうか、中田の説教に押されて脇の方に小さく載っているだけなのではないか、と疑問が湧く。『聖潔の友』が週刊であったこと、現代のA4相当の版型で八頁というかなりの分量であったこと、他の記事と比較して体験談は一定以上の分量を占めて重視されていたことなどについてごく簡単な言及があるべきだったと思われる（この当時、救世軍の機関誌『ときのこゑ』は月二回刊であり、体験談を毎号載せていた）。メディアについてまとまった確認があることで、他のメディア・他教団との比較も可能になり、ホーリネスが「実験」（体験）をいかに強調していたかがさらに引き立ったであろう。

次に救世軍との比較を試みたい。先に述べたように、救世軍とホーリネスとはともにメソディストから出た流れであり、前者の山室軍平と後者の中田重治とは同時代人であったために、しばしば比較され、また信者も行き交ったらしい。本書からも、救世軍で立ち直ったものの酒を呑んでしまって行かなくなり、ホーリネスにて救われる、という体験談がいくつか引用されている。

同じメソディズムから出てはいるが、山室は神癒と再臨（リバイバル）を説かない。また、聖潔の完全性も強調してはいない。「聖潔を受けたからといって、〔無意識の〕過失のない人間になるのでない。ただ〔作為的な〕罪を犯さぬ人間となるだけである」と山室は述べる。聖潔を受けたものは原則として罪は犯さないが、もしも犯したらキリストの血によって赦される、しかしこれは例外である（六四―五頁）という、前述の奇妙な留保と比較するとき、中田の説くホーリネスの教理が、人間努力を強調するメソディズムの流れにありながらも、救世軍よりも超越的な力の計り知れなさを強調していることが明らかになるだろう。内閉化した中田の運動と比して、救世軍は戦略的といえる巧みな社会事業を展開し、また皇室との距離も近かった点なども興味深い比較となるはずだ。

ここでは救世軍との比較を例に挙げた。言い換えれば、同じ時期に刊行されたMark R. Mullins, *Christianity Made in Japan*, University of Hawai'i Press, 1998が、多くの日本土着のキリスト教を並列しているのとつきあわせてみると、他との比較がないために、ホーリネスという特色ある教団の位置がやや見えにくくなっているかも知れないと、評者には感じられたのである。

ついで、担い手たる「民衆」について考察しよう。

「初期ホーリネス」の主たる担い手であった「民衆」とは、



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

都市在住の中下層労働者であり、それまで身につけてきた通俗道徳と都市の消費文化や競争社会とのディレンマに「煩悶」する「青年」であるということができる。注意すべきは、著者にとって「民衆」とは自明の実体的な存在ではないことである。著者は「これまで名前さえ付けられていなかった一般生活者の心身活動や意味形成過程に、ある種のポジティブな光を当て直そうと」することにより見出されるものとして民衆を捉えた（池上「宗教学の方法としての民間信仰・民俗宗教論」『宗教研究』三二五号、二〇〇〇年九月）。

本書において言及された、資本主義経済が浸透した都市の生活とは、一方で激務や疫病や貧困ゆえに身体が健康上の危険にさらされており、もう一方で、競争を是とする社会にあってその疲れを癒す場所にはならない歓楽的消費が精神面をも危険にさらしている、と捉えられる。さらに、明治政府の教育政策で、近世以来の通俗道徳（勤勉、倹約、孝行、謙譲）は、忠君愛国の理念と接続して堅持称揚されたが、通俗道徳の実践のみによっては解消されない社会問題が多く発生していた。そこにあって、道徳のダブルバインドを抱えた若者たちが、聖潔の教理に引き寄せられた。「聖潔の教理が厳しく断罪した内面の汚れとは、都市生活の激しい競争と誘惑の中で、なおも『正しく』生きたいと願う人々が、みずからの内に見いだした葛藤の残骸ではなかったか」（六三頁）と著者はいう。

本書における著者の主張は、このような「民衆」とその葛藤による罪責感とをみごとに構築的に切り出すのだが、著者がその対極に、エリート志向の青年たちの立身出世主義（一七七頁）――こうした社会道徳を単なる建前と割り切り、我が身の立身出世に奔走する立場――を置くとき、ひとつの疑問が湧いてくる。それは、ホーリネスにおけるリーダーたちをどこに位置づけるか、ということである。

青森県弘前市の名門校を出て、東京英和学校に学びながら中退を余儀なくされ、伝道に身を投じてムーディー聖書学院にて聖潔体験を得た中田重治は、この図式の「民衆」か「エリート」のいずれに位置するのだろうか。あるいは、これらの外にあるとすれば、これらとどのように関わるのだろうか。接点がなかったはずはないのである。彼以外の、中田の妻や、他のリバイバル指導者たちはどうだろうか。メソディストから救世軍、ホーリネスと移り変わった金森通倫のような人物は、煩悶青年の側になるだろうか、あるいは要領よく泳ぎ回るエリートの側になるだろうか。リバイバルを熱く説きながらも、信者たちの感情の発露を冷静な目で見てもいたリーダーたちのカリスマ性の源泉がどこにあったのか、それを知るためには、著者の図式のどこに彼らが位置づけられるかを改めて問い直したい。それにより、煩悶青年としての大衆の救済を目指しながらも、やがてリーダーとして煽る側に立つと、リバイバルという現象の魔力にとりつかれて突っ走ってゆくという変遷をみることもでき、リバイバルという現象の一側面が明らかになるようにも思われるのである。

本書はホーリネスという、ほとんど研究されてこなかった教団を対象とした開拓的研究でありながら、同時に「都市」の「煩悶青年」に代表させて「民衆」を考えることで、日本の近



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



代宗教をも問うものとなっている。また、他の聖霊運動との接点についても急ぎ足ではあるが言及している。したがって、近代キリスト教運動史や日本宗教史などの、本書が直接に関わる諸分野にて広く吟味されることを評者は望むものである。

また、いわゆる新宗教研究の分野においても資すること大と思われる。内閉的な性格をもった一教団を研究対象としながら、教団をひとつの実体とみてその内部の研究でことたれりとするのではなく、それが置かれている都市階層やキリスト教世界の文脈との往還を重ねることで、他の研究領域との対話が可能になると示してくれたのであるから。

**注**

(1) 米田勇『中田重治伝』大空社、一九九六年（昭和三四年、中田重治伝刊行会刊のリプリント）。

(2) たとえば池上「現代アメリカのキリスト教神癒論」荒屋重彦編『癒しと和解』ハーベスト社、一九九五年や、「現代アメリカにおける悪霊祓い――Fred Dickasonによるカウンセリング事例から」荒木美智雄研究代表『米国とメキシコにおける現代民衆宗教の世界観と救済観に関する比較宗教学的研究』平成五年度科学研究費補助金研究成果報告書、一九九七年など。

## 芳賀学・菊池裕生著『仏のまなざし、読みかえられる自己――回心のミクロ社会学――』

ハーベスト社　二〇〇六年一二月二五日刊
A5判　xx＋三五二頁　三四〇〇円＋税

櫻井義秀

本書は真如苑青年信者がどのようにして信仰を獲得していくのかを、弁論大会におけるフィールドワークを通して詳細に記述し、宗教的回心研究に新たな方法論を提示した意欲的研究である。

真如苑は一九三六年に立川不動尊教会として立教し、一九五三年より宗教法人真如苑となる。大般涅槃経を経典とする信者数約八〇万人の在家仏教教団である。真如苑開祖の伊藤真乗（一九〇六―一九八九）生誕一〇〇年を記念して、全国の主要都市において伊藤真乗が制作した書画や仏像彫刻の回顧展が開催されているが、指導者の人間的魅力や教団の開放的な広報姿勢ということもあってか、宗教研究者を惹きつけている教団の一つである。宗教社会学による新宗教研究としては、近年にない濃密な研究書が真如苑を対象としていたというのも偶然ではないように思われる。本書と、二〇〇四年に刊行された秋庭裕・川端亮著『霊能のリアリティへ――社会学、真如苑に入る』（新曜社）がその二冊である。なお、同書については、書



NII-Electronic Library Service